

第7回海外ネットワークに関する万国津梁会議

日 時：令和4年2月10日（木）13:00～15:00

場 所：沖縄県庁1階第1会議室・第2会議室

出席者：小川寿美子委員長、新垣句子委員、新垣秀彦委員、新垣誠副委員長（オンライン）、佐野景子委員（オンライン）

1. 開会

2. 事務局からの説明

配布資料の確認及び資料3「提言書案」について議事概要最終版の記載に改める旨説明。

3. 議事

(1) 提言書（案）について

（小川委員長）

資料3「提言書案」について協議する。

委員各位には事前に送付し確認頂いている。まず、概要を簡単に説明し、その後、各委員の御意見を伺いたい。

まず、この提言書案の作成にあたり、1月5日の前回会議での各委員の意見を盛り込む形でまとめることに努めた。また海外ウチナーネットワークの活用という本会議が立ち上がった経緯を踏まえ、海外ネットワークに関する万国津梁会議の提言における提言ⅠからⅣ、そして課題1から4を意識してまとめた経緯がある。

以下、資料3「提言書案」の詳細と記述ページ（括弧内）について説明する。

Executive Summaryは、短く絞った概要となる（1ページ）。

第Ⅰ章「はじめに」では、提言書が書かれた背景を記載している（1ページ）。

第Ⅱ章では各委員別に、第7回世界のウチナーンチュ大会に対する提案内容に係る意見やお話頂いた内容について、海外ウチナーネットワークに関する万国津梁会議での課題及び提言に織り込む形で、今回のウチナーンチュ大会の開催の促進にも繋げたいという願いを込め、提言書を作成した。

そういう経緯を踏まえ、2ページでは、共通課題を含め、課題1から課題4に対する

我々の提言容を赤字で示している。次に、前回の海外ネットワークに関する万国津梁会議の提言書で作成した概要図を改めて提示し（3ページ目）、次ページの図2では、前回の会議での各委員の意見及び発言を、私のほうで課題別に色分けして分類した。

提言内容に係る発言の該当箇所が追えるように、それぞれの発言内容の後には、例えば、第Ⅲ章以降、(1b)や(1c)という形で記載し、巻末資料の会議議事録に立ち返り参照できるようにした。それは、今回の提言書案を作成するにあたり、各委員のどのような発言が提言書のどこに反映されているのかを提示したかったからである。各委員の会議での貴重な発言をできるかぎり反映することに努めた。よって、最後に提言書として提出する最終版では、この(1b)や(2c)等は削除してもよいのではと考えている。

提言書を作成する現段階では、少なくとも委員の皆様方には、前回の会議での各発言がどこで用いられているかについて共通理解して欲しいと考え番号を付した。

第Ⅲ章、「課題1、2を解決するために大会でできる試みは何か」（5ページ目）から内容を確認する必要があるので読ませていただく。

課題1を解決するために大会でできる試み（5ページ）として、まず、ハイブリッド開催であることはわかっているので、それをチャンスとして生かしていければという話しをしたと思う。対面のみでの大会開催時は人数制限が必要だったが、オンライン開催であれば、物理的にその場にいなくても、もしくはある会場に入らなくても、いろいろな方に周知して参加頂けるという意味では非常に画期的な転換期ではないかという話をした。オンライン開催は「誰一人取り残さない」、一人でも参加できる世界のウチナーンチュ大会といったキャッチフレーズのようなものを作成してもいいかもしれない。つまり今までは県人会を通す必要があるなど、人数制限の縛りが長い間続いていたが、それはなくなったということ。

またオンライン開催のみならず、テレビ局を通じた県民へのアナウンスについても、拡充して行く方が良いのではということが話された。若者のイベント提案としては、気軽に楽しく参加できるものがないのではないか。例えば、音楽、クイズ、オンラインスポーツ等々、そうした内容をまとめた。

課題2を解決するために大会でできる試み（5ページ）として、誰もが沖縄に心を寄せる、良いチャンスと捉えて、ウチナーネットワークに関わりたいと思うような発信を心がけるということが話された。具体的には、教育委員会や実行委員会に所属する団体が141あるはずだが、それらの組織をどう巻き込むか、また巻き込まれて自主運営するかという

ことに期待をかけたという意見があった。実行委員会のメンバーとして名前を連ねるだけでなく、何か自主的に今回いろいろ企画してもらえないかと、我々、海外ネットワークに関する万国津梁会議の委員会から提案としたいと考える。例えば、複数の移民輩出市町村と意見交換しモデル市町村を設定して、何か企画を立案するのもいいのではないかと意見があった。また県や市町村図書館、博物館で毎年開催されている企画展示が開催される際に、参加者と主体的にネットワークをつなぎ、拡張するにはどうすればいいかかという視点を踏まえた開催方法も考えられるのではという意見。その際にオンデマンドの教材の作成と活用といったアプローチも可能なのではないかと発言もあったかと思う。更に、コロナ禍で世界的な受難を受け、ウチナーンチュの「シンカ」意識を持って、世界の輪というグローバルネットワークでどう乗り切っていくか、乗り切ることができるのかということ念頭に置きつつ、今回の第7回に挑んだらどうかという意見もあった。

課題3を解決するために大会でできる試み（6ページ）として、1月5日の会議に参加できなかった新垣誠先生から後日頂いた意見を参考にして記載した。具体的にはワールド・ウチナーンチュ・バザールのオンライン開催はどうかという意見である。例えば、大会のグッズやファッションの販売を行って、その売上げを世界のウチナーンチュのコロナ救済に充てるような取組みができないかというアイデアである。そういったユイマールを実感・共感する仕掛けとしてのクラウドファンディングの仕組みを利用したチャリティー募金の事業の一環というものを提言したいという意見であった。他にも、沖縄、世界の企業の産業を全国に伝え、県経済への貢献に繋げることが大切であり、世界のウチナーンチュ大会で実現できればいいのではないかと意見があった。特に新垣旬子委員から、沖縄にはツールはあるがその構築がまだ途上であり、システムよりもそれぞれのパーツをニーズに繋ぐ仕組みを考える必要であり、物産の強化、通信販売、就労支援の機会にできれば良いという話があった。

課題4を解決するために大会でできる試み（6ページ）、つまり世界のウチナーンチュの拠点を物理的にこの沖縄に持つことについてであるが、過去も含め、今回の大会の経験をしっかり蓄積していくことが大切という意見があった。例えば、移民関係の資料収集やアーカイブ化を試み。既にウチナーネットワークコンシェルジュが設立されており、持続可能な活動への支援と仕組みを作っていくことも大切ではないかという話があった。

最後に、共通課題を解決するために大会でできる試みとしては、例えば、レガシーがハイブリッド開催のみでは弱いのではないかと、ハイブリッド開催はツールであってツール以

外のレガシーが必要だと考える意見があった。例えば、第7回大会のレガシーはシンカ意識を実感することとし、そのために必要となる“共感のコミュニティ”を形成するという意見があった。自分の行動が大きな歴史の流れの一部であると感じるときに、人は共感もしくは共同体の一員であるという意識を持つということがあるので、(課題3につながるのだが)、ハワイのウチナアンチュコミュニティで既に試みられ、受容されている募金支援をするなど。世界へ開かれるグローバルな意識とウチナアンチュという極めてローカルな意識の2つのベクトルを意識しつつ、こういう募金支援(クラウドファンディング)の仕組みを立ち上げて、これを1つのレガシーとしてはどうか、つまり、共通課題の解決のための「クラウドファンディングのためのワールド・ウチナアンチュ・バザール開催」という案があった。

大会開催に関する意見(7ページ)については、アイデンティティの確認がチャレンジなテーマではないかということ、それからアイデンティティ、この大会を絆の再確認の機会とし、過去の大会のような皆がシェアできる強いメッセージがあるとよいのではないかという意見があった。

例えば、第6回大会では「世界のウチナアンチュの日」制定が大きなレガシーだったと思うが、第7回のオンライン開催は決定しているので、沖縄のWi-Fi環境というのが、より強化されるようなきっかけになるといいのではないか。沖縄からの発信のみならず、世界から発信される大会の様子を沖縄のどこにいても送受信できる双方向の大会イベント開催の実現は画期的である。双方向であれば24時間のライブ、つまり地球の裏側のブラジルは、こちらの夜が向こうの昼、こちらの昼が向こうの夜なので、24時間ライブ録画を織り交ぜて、YouTubeとテレビを織り交ぜて発信する、オリンピックを配信する方式に倣い、県民はもとより県人会に所属しない海外のウチナアンチュにも大会の様子が届く可能性が高くなるのではないかという意見であった。

第IV章. おわりにでは、以上、文章で綴った提言を、私なりにさらに短く課題順にまとめた(8ページ)。

順に説明すると、課題1を解決するために大会でできる試みとは、例えば、「誰一人として取り残さない、誰もが参加できる大会」として、「#UCHINA10,000」を実現すること。WUBは「#UCHINA1,000」を実施しているが、前回大会参加者が7,000名余りあったということなので、それを上回ることを目標に世界の10,000名と繋がる、ウチナアンチュが一同につながるという機会があれば象徴的なイベントであると思う。これも

一つのレガシーになるのではないか。

課題2を解決するために大会でできる試みとして、企業や行政等141から成る大会実行委員会の各団体自らがウチナーネットワークに巻き込まれて、半年前から自主企画をしていただくという提案。これは特に新垣秀彦委員からの強い要望があったと思う。

課題3を解決するために大会でできる試みとして、ワールド・ウチナーンチュ・バザールのオンライン開催、クラウドファンディングによるコロナ禍支援募金の提案。

課題4を解決するために大会でできる試みとして、移民関係の資料収集とアーカイブス化、ウチナーネットワークコンシェルジュの役割強化を提案した。

共通課題を解決するために大会でできる試みとして、第7回大会のレガシーは、シンカ意識を実感できるための実践を通じた共同体の一員としての意識の高揚というものはどうかというものであった。

第IV章「おわりに」は、箇条書きで非常にコンパクトにしたので、ここに書き漏れている重要な事項があるかもしれない。委員の皆様にもおかれても、最後の「おわりに」に追加すべきものについて意見を聞きたい。

本提言書の資料は、発言者別意見（9ページ以降）、世界のウチナーンチュ大会のイベント案（資料4：別添資料）とあるのは、前回の会議資料で皆様に説明したものを参考資料として掲載している。

発言者別意見（9ページ以降）は先ほど説明した通り、各委員もしくは大会実行委員会事務局の皆様の発言内容を発言者ごと時系列に並べている。これらは今回皆様方と一緒に、この提言書の内容を確認するために、すなわち、この提言書に書かれた発言は前回の1月5日の会議内容を根拠にしたかということを示すために掲載したものである。これを削除すべきなのか、もしくはそのまま残しておくべきなのか、もしくは第III章に記載される(1b)や(1c)等を削除して、そして後ろに残しておくというのも1つの案かと思うが、それらについての意見も聞きたい。

以上で、私からの説明は終わるが、何か資料に関する事で、質問があればお願いしたい。

(質問なし)

ありがとうございます。

次に、委員名簿に沿って、皆様の意見を聞きたい。

本日、安里三奈美委員が欠席です。事前に文書で意見をもらっているのですが、事務局から

紹介されたい。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 阿波連主幹)

安里三奈美委員から頂いた「第7回会議における提案」の資料について、事務局で代読したい。(以下読み上げ)

まず、5ページ(1)課題1、そして課題2の試み案として、沖縄のテレビ番組を海外でも視聴できるよう働きかけを行う。この提案に関しての背景として、つい数年前までNHKワールドが家庭で見られ、NHKから日本の情報を得ていたが、最近ではオンラインが発達し、自宅のテレビを契約すると、日本のテレビ番組をいつでも毎日見ることができる。また、日を遡っての視聴もできる。海外でも日本の番組が視聴できることによって、日本の報道ニュースやドラマ、アニメのおかげで海外では日本の文化や料理、日本語を学ぶことに繋がっており、海外と日本を繋ぐ上で欠かせない存在となっている。

チャンネルは主要のNHK、日テレ、テレ朝、TBS、フジテレビ以外にも関西の番組、映画など50チャンネル以上あるが、沖縄のテレビ局の番組もチャンネルとしてあれば、多くの県系人が視聴できるだろうと考えている。

県が表立ってなのかテレビ局なのかかわからないが、海外でも沖縄のテレビ番組を見られるよう働きかけを行ってほしい。この提案の働きかけが世界のウチナーンチュ大会を機に成功すれば、今後のウチナーネットワーク強化・発展において大きな成果といえる。

これまでの大会でも実施しているが、「大会の開催をテレビ局周知のほか、新聞、ラジオ、バス、モノレールなどでもアナウンスし、広く呼びかける」、海外・国内県人会参加者の「大会前後期間中の路線バス無料化」、「観光施設の入場無料又は入場料割引」を今大会でも継続して実施する。

次に、5ページの(2)課題2の試み案として、オンライン開催であれば多くの県系人が教育の場に立つことができるため、学校教育機関での出前授業の増加、交流できる生徒数の増加が見込める。

次に、6ページ(3)課題3の試み案として、企業の商品をPRする以外にも、商工会やJETRO、JICAと連携し、農作物、穀物、畜産、食品などの沖縄と海外、海外県系社会の輸出・輸入の事例やノウハウを紹介する場もよい。

(文言に追加)産業祭りや物産フェアの開催を海外県系社会にも開催を伝え、オンライン配信で当日視聴または後日視聴できるようにするなど、他イベントと大会連携にすること

など。

次に、6ページ(5)共通課題の試み案として。「関心や専門性のある分野や課題で様々なつながりを持つ」に関して、今まで沖縄文化の体験や移民をたどるツアーなどのプログラムを実施してきたが、例、県内の畜産を視察するツアー、さとうきび生産を視察するツアー、琉球舞踊の衣装や小物作り、沖縄旧盆料理作り、旧盆の仕方など関心や専門性を絞ったツアーも実施するとよい。

今大会は来沖して参加する人が少ないと予想されるので、参加希望人数が少ないと思われるが、海外県系社会の日常生活に目を向けて関心事項や困りごとに目を向けて実施することは大事なことである。

次に、7ページ(6)大会について。Wi-Fi設備について、オリンピック開催でも実施されていたが、開会式、閉会式などのメイン会場にWi-Fiアクセスポイントを多く設置する。会場内の参加者がスムーズにネットワークを利用できる環境を構築する。

会場にネットワーク環境を設備することで、参加者が同時配信の一役となれる。

8ページ。P5～P8のまとめとして抜粋されて書かれているが、明記されている試みと、されていない試みがあるため、誤解を招かないか。試み案全てを一覧にして書くほうが分かりやすいのではないか。最後のまとめ方については委員の皆様に一任します。

以上です。

(小川委員長)

どうもありがとうございました。

安里委員からは非常にプロダクティブな意見を頂いていると思う。素晴らしい意見だ。何かこの意見に関連して、意見がある方はお願いしたい。

(新垣誠副委員長)

全て素晴らしい提案だと思う。一番初めの意見が自分も気になっている。アメリカに10年程住んでいたのだが、ケーブルテレビの普及がすごい。特に韓国は文化庁が非常に力を入れて国策として韓国の言語や文化を世界に広げることに予算を割いており、プログラムがかなり充実している。

そこで目にしたのは、コリアンアメリカン3世・4世ぐらいの世代が、それら韓国ドラマやK-POP等を見て、そういう風に韓国人としてのアイデンティティのようなものを

醸成するような現実であった。

Netflixのようなものは県では無理であると思うが、今多くのYouTubeチャンネルが存在すると思うが、コンシェルジュにおいて世界のウチナーンチュネットワークのオフィシャルYouTubeチャンネルの設定ができないかと思ったりする。

多言語放送として、若い世代のアイデンティティ形成に寄与するようなプログラム、例えば、文化の紹介、料理の仕方、料理番組といった色々なことがそこから可能かと思う。そして、例えば、新聞の特派員みたいな方々がいるが、各県人会や各移民コミュニティのポイント・ポイントで、いわゆるそこでのYouTuberではないが、そこで現地のことを紹介してもらおうとか、双方で実施する等、そういう形でのネット配信であれば、そこまでハードル高くなくできるのではないかと感じた。以上。

(小川委員長)

ハードルが高くないというのは予算の面ということですか。

(新垣誠副委員長)

その通り。予算及びマンパワーといったところ。

(小川委員長)

他に安里委員の意見に対する追加もしくはコメントなどあればお願いしたい。

(新垣秀彦委員)

今まとめていただいた提案書案についても、非常に時間と労力を要したものと思っており、委員長は非常に御苦労されたと思う。

安里三奈美さんの意見について、この提言書の中では書き切れない色々な具体的な案があると思う。確認したいが、今141の実行委員会の委員の皆様がいる。次回開催される実行委員会では、例えば、パブリックコメントがあるのか、あるいは別に意見を伺う機会があるのか。多くの団体の代表者であるので、同様の意見は出てくるのかと思うが、実行委員会の時間の制約等で、その場では出づらいのかもしれない。

141の各団体が主体的に独自の企画をする、もしくはその主体者たちに何らかの提案をして実施してもらい機運づくりは非常に重要である。安里委員もそうであるし、ほかにも

こういう具体個別の意見を持っている方々がいれば、実行委員会の皆様も非常に助かるだろうと思う。時間の制限もあると思うが、事務局としてどうか。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

パブリックコメントを実施する予定はないが、今回、万国津梁会議で提案いただいた様々なアイデアについて、次回4月の実行委員会の際に紹介させていただく。事務局としては、実現可能なものについて検討した上で意見を聞きたいと考えている。

(小川委員長)

実現可能かどうか、そこが大切であるが、その具体的なプロセス、つまり実行可能かどうかという検討、そして実際に実施するプロセスに至るまで、どのような仕掛けづくりを考えているか聞きたい。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

予算の範囲もあるので、今、実際検討している内容にプラスアルファできるもの、予算を考えながら4月までの時間は短いですが、これから検討していきたい。

4月に意見を聞いて、その後、盛り込めるものがあれば、調整していくということで考えている。

(小川委員長)

おそらく県が依頼すると、依頼を受けたということで、「では、お金はどうなる。」と来ると思う。しかし、秀彦委員もおそらく同じ考えだと思うが、大会実行委員会に属する各団体が自主的に関わってくれるのならば、何かこちらが挙げたリストに対して、ここは自分たちの分野なので行います、というふうに手を挙げて頂けるし、あまり予算に縛られなくて済むのではと思う。県が依頼するとやはりお金のことを考えなければいけないと思うが、秀彦委員、そういうことは可能と思うか。

(新垣秀彦委員)

例えば、バス、モノレールの無料化についても、交通関係の企業がウチナーンチュ大会に賛同して行います、というような入り方だと思う。

そうした形で広がっていけば、テレビの配信についても、今テレビで行っていることをオンラインのケーブルあるいは、Wi-Fiで行うとか考えられるかもしれない、そこはテレビ局が主体的になって考えてもらうことになれば、過去のテレビ番組でも沖縄紀行等、様々に海外のウチナンチュを取り上げている。そのあたりに訴えて響くのであれば、考えるところはあるのではないかと思うので、その入り方を事務局なり実行委員会の中で、強く考えていけばいいのではないかと期待している。そのように実行委員会そのものを運営していった方が良くはないかと思う。

(小川委員長)

すなわち、予算ありきでなくとも、「こういう提案がありますということではいかがですか」という形で、予算はあとで検討するとは言ってはいけないが、各団体の意思があったら、利益が先行せずとも動いてくれるのではないかなと期待している。

(沖縄県交流推進課ウチナンチュ大会準備室 宮城室長)

ちなみに、前回もバスやモノレールの無料化については、沖縄県バス協会、沖縄都市モノレール株式会社へ、海外からの大会参加者へ無料でできませんかということで協力依頼を行っている。

(小川委員長)

そのような場合は、県の予算はかからないか。

(沖縄県交流推進課ウチナンチュ大会準備室 宮城室長)

その通り。企業様の厚意という形。協力頂けないかということで実施しているところなので、今述べられたように、提案にある中で賛同してくれるところがあれば、ぜひ、協力いただきたいということでお願いすることは可能かと思う。

(小川委員長)

是非とも予算ありきでなく、まず、これをやったら素晴らしいということで、各団体、実行委員会に所属する各組織の多大なるご協力が得られれば良いと私たちは思っている。よろしくお願ひしたい。

(新垣秀彦委員)

おそらく今回のウチナンチュ大会も、オンラインで行う等様々なテーマがあるだろうから、ではオンラインとかハイブリッドなどでできることは何があるのかということも投げかけてもいいのかなとも思う。

(小川委員長)

ほかに安里委員の提案に関する意見が無ければ次に移る。

旬子委員、何か思うところ、何でも構わないのでお聞かせ願いたい。

(新垣旬子委員)

この万国津梁会議において、ウチナンチュとしての私たちが提案を作っていく。このことがおそらく、ウチナンチュ大会とはまた違う意味で、県の政策や県民にも伝わり、どういう課題があり、今後の方向性が検討されていく。

ウチナンチュ大会は、5年に1度の従来の形態から今回はハイブリッド型になる。その次は第8回となるだろうが、今後は5年に1度のイベントではないのだと思う。

おそらく、毎年、毎月、毎日、皆が考えていく中で、より良く、より現実的に、より合理的に、より理想的な考えが多く出てくると思う。

私たちの万国津梁会議の提言については、県庁の中に担当部署がある。この担当部署がコーディネーターとなり、情報収集や発信を確実に行っていければ、皆様の意見は、以下の時点でできること、今後に生かせることとして蓄積できる。そのように今日の会議が生かされていることが大事だと思う。素晴らしい意見が多くある。

私は生まれながら華僑だが、小学校から沖縄で育っていてもウチナンチュではあるが、私が関わっている華僑の組織に関し、206万の華僑を対象にカードを発行している。個人情報に関わるので、そこまでのことを考えなくても、「#UCHINA1,000」、「#UCHINA10,000」のようなネットワークをコンピュータの活用を含めどのように作っていくかということ。

沖縄の場合、安里委員が述べたWi-Fiのアクセス (P7(6)) をしっかりしないと成功しない。成功すれば、多くのことを伝えることができる。新垣誠委員が述べたように、YouTubeを活用すれば、各人が各々の分野のYouTubeを保有するだけでも随分と形ができて

いくと思う。今回は予算が難しく時間が難しくても、皆様の素晴らしい意見について、今後、万国津梁会議の課題も含めて、事務局がコーディネートしていければ良いのではと思う。

(小川委員長)

ありがとうございます。

先ほど、冒頭に5年に1度のウチナーンチュ大会は、様々な人とのつながり、そして、今回のオンラインでの繋がりによって、それが日々の日常の中に継続されていく可能性を多分に秘めている。

そういう意味では、今回の大会は、今までとは違ったターニングポイントになる。もっともっと世界のウチナーンチュが強く、ネットワークもしくはノットワークを広げていける大きなチャンスなのではないかと思う。そういうことを期待したい。

県庁内の担当部署について、何か動きそうですか。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

前回の会議終了後、担当部署の担当とWi-Fiについて、今後どういう形で進んでいくかについて意見交換を行った。

引き続き、担当部署と意見交換しながら、できるだけそういう環境が今すぐではなくても、今後整っていくような形でできていけばと考えている。

(小川委員長)

YouTube等、それぞれが色々と趣向を凝らしたものを、どんどんアップしており、それらをしっかりとつないで今回の大会の目的に沿って行えれば、大きな力になると思う。

やはり、いずれにせよ、コーディネートする人たちが、それら点として存在するものを、うまく線や面にする、そういう大きな力があれば、世界のウチナーンチュ大会の絆も、もしくはアイデンティティの意識もずいぶん高まるのではないかと思う。

(新垣句子委員)

5年に1度のウチナーンチュ大会の実行委員会は、毎年開催は出来ないので、県庁の担当部署が意見収集することが望ましいと思う。

前回の会議から今回の会議の間に、沖縄のWUB会長、商工会議所、青年会議所の皆様にお会いし、これまでの大会への参加について聞いてみた。

そうすると、青年会議所や那覇商工会議所、中央会の青年部など、皆が集まったの交流はすごく有意義だったという話が聞けた。私のほうが少し情報不足だったのだが、県内ではウチナーンチュ大会への関心がとても高かったのが分かった。

関わっている人たちは誇りと喜びを感じている。そうしたことを個別であるのか、あるいは更に盛り上げて、どう他の人たちに伝えているのか、あるいは、ボランティアで参加したという思いだけではなく自分自身も主人公であるという気持ちの持たせ方も大切ではないかと思う。

(小川委員長)

引き続き、秀彦委員にご発言をお願いしたい。

(新垣秀彦委員)

概ね先ほど述べたこととなるが、提言書の形としてはこれで良いと思う。

しかしながら、実行については実行委員会に委ねざるを得ない。ウチナーンチュ大会に関して、万国津梁会議もしくは県民や世界各国の皆様の意見や考え方を、実行委員会がどのようにとっていくのかが大事だと思う。

提言書そのものは提言書だが、実行委員会の中でどのように実行していくかということ。

そこはまた各実行委員会の皆様が主体者として、必ずしも新しいこととしてではなく、それぞれが現在行っている事業の中で、どう関わって、どう落とし込めるかという視点になれば色々なことができるのかなと思っているので、その辺りをまたこの提言書を通してお願いしていくことになるものと考えている。

(小川委員長)

確かに、いくらきれいな文章を書いても、それを第三者的な立場で客観的にしか受け止められなければ、結局、それにかけた労力というのも無駄になる。

今お話を聞いていて、例えば、メールのやりとりについても、一斉メールで送信され名指しされなければ、自分には関係ないと読み過ごしてしまう。だが、メールが名指しであると真剣になって読むというところがある。今、秀彦委員のお話をお伺いしながら感じた

のは、例えば、最後の資料の「おわりに」という言い方がいいのか、最後の提言の具体策みたいな名前がいいのか定かでないが、例えば、Wi-Fiの強化というふうに提案する場合、具体的な企業名を名指しする等すれば、自分たちのところでは難しいが、では君のところはどう？という形で、少し自分事として考えてもらう起爆剤になるかと思ったりする。

(新垣秀彦委員)

おもしろいというか、入れていいのではないか。

特に、僕も県庁のOBなので、よく知事が基本政策、いろいろな政策を出しますよ、そして、この部分については交流推進課が担当して進めていくべきものと、そういう仕分けをしていくので、そういう手法は事務局の皆さんは得意なかなと思うので、そういう方法もあるのかなという気はする。

(小川委員長)

そこまでやらないと、何か自分事として感じずに終わってしまうような気がするので、いい案をいただき感謝する。あとでまた議論したい。

次に、誠委員にお願いしたい。

(新垣誠副委員長)

まず、小川委員長に感謝したい。多くの様々な意見をここまでまとめられて、本当に感謝している。

県庁の中に担当課を置く話は昔からあるが、なかなかこれは厳しいのかなという感じがする。

今、コンシェルジュというものが新しくできたので、有効活用できないか、もっと拡充の方向で動けないかなというところを考えたりする。

去年の世界のウチナンチュの日の際のシンポジウムを行ったときに登壇していただいた例えば、ファミリーマートさんとか、あとリウボウさんとかについてだが、世界のウチナンチュの物産展についての話しも出た。

先ほど秀彦委員からもあったが、民間企業の中で、賛同があったりあるいはそこに新たなビジネスチャンスを見つけたりだとかということもあると思う。今まではWUBとしてあったのだが、それをそのコンシェルジュをもう少し広げてコンソーシアムのような形に

して、そこに例えば県も入る、あと民間も入る、そしてあとは民間のビジネスに加えて国際協力的なもの、特に草の根のスキームだが、そこにJICAさんも例えば入れば、活動の枠が様々に広げられないかなと思う。

ビジネス面でも、今回のボリビアの話もあるが、ソーシャルビジネス的なものをもっと盛り上げたりできないのかなと思う。

コンシェルジュについて、先ほどYouTube配信の話もあったが、今回の大会を起爆剤にして、先ほど旬子委員からもあったように、5年に1度という話ではなく、こうしたネットワークとそのつながりを、いかに日常化していけるところに持っていけるのが大切だと思う。

インターネットを通してそうだが、そこでは様々な交流が生まれるという形に持っていき、首里城再建も始まってくるので、例えば、それを随時中継するのも良いと思う。世界のウチナンチュの皆様もとても気になっていると思う。

コンシェルジュ自体もおそらく拡張する必要があるのかなと思うのがスタッフを貼り付けるということではなく、様々な人を巻き込めるような、例えば、各市町村の国際交流団体であるとか、各市町村の国際交流推進事業等と連携させることができれば、さらに活発化していける実は今回いいチャンスになるのではないのかなと考えている。

(小川委員長)

誠委員、どうもありがとうございました。

特にコンシェルジュを強化・拡充していくというような話は、大いに賛成したい。

これまで大会の実行委員会というものがあったが、でも、いざという時に痒いところに手が届かない、もどかしさみたいなものもあったと思う。

ところで大会実行委員会での話し合いは、もう5月、4月で終了なのか。

(沖縄県交流推進課ウチナンチュ大会準備室 宮城室長)

実施本部を立ち上げるため8月にも予定している。

(小川委員長)

4月から8月の間には何か予定しているのか。

(沖縄県交流推進課ウチナンチュ大会準備室 宮城室長)

集まるものはない。

(小川委員長)

すごく勿体ない。今の誠委員の話にもあったように、逐一発信していてもいい時期だと思う。オリンピックの広報もそうである。2か月前の発信では届かない情報も、6か月前や今ぐらいの時期から行えば、学ぶ機会などもあるし、知る機会も多くなると思うので、その辺が今までもどかしかった。でも、そのもどかしさを解決してくれる大きな頼みの綱というのが、私はコンシェルジュではないのかなと思っている。

コンシェルジュの強化・拡充に関して、例えば、今、誠委員はコンソーシアムみたいなものを、より柔軟に対応できるような、オーソライズされた実行委員会組織とは別に、参加したい人、これをビジネスチャンスと思う人たちが、世界のウチナンチュ大会に大きな価値を見いだして、例えばお金は二の次と思う人たちも含め次々につながり出来ることを実行できれば良いと思っている。

誠委員に先ほどのコンソーシアムの話をもう少し具体化して説明して欲しい。何が必要なのか。

(新垣誠副委員長)

小川委員長が述べたように、一つはどれだけのステークホルダーが集まるかということだと思う。先ほど話したウチナンチュの日についても、皆さんはすごく熱い。

やはり、参加した本人たちも世界のウチナンチュとの出会いがあり、その熱い想いを持って取り組まれている。今、プラットフォームがないというか、土台がないために、色々な思いがある人たちが実はいるものの、これをどう実現化していいかわからないというところがあると思う。

よって、まさしく少し緩やかな形のコンソーシアムを組めば、そこでの交流を通して様々なシナジーが生まれて、あれもできる、こう考えているのであれば一緒にやろうとか、そういうものが出るのではないかなと思っている。

予算措置に関しては、プロジェクトベースとして、プロジェクトに予算がつくようになるのか、或いは、果たして交付金が適用できるような範囲なのか、その辺のところはよくわからない。しかし、完全に県・行政側からの予算措置というのも違うと思っており、や

はり民間のほうしっかりと回っていくような歯車をつくっていくべきだと思う。

そのための情報発信、情報共有、今までつながらなかった人たちをつなげるための仕組み作り等の最初のステップにおいては、行政の役割ももちろん重要になってくると考えている。漠然としているが以上。

(小川委員長)

実行委員会事務局としてはどうか。こういうことは、実行委員会に相談すべきものかも含め、実現・実行可能なものなのか。意義はどのように考えているか。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

それが実現できればかなり大きく、色々な繋がりができるなということなのだが、県のほうでそれができるかは、どのような課題があるかも含めて、検討しないとイケないと考ええる。

(小川委員長)

県はワンオブゼムで、参加団体の一つというカウントでよいのか誠委員はどう考えているか。

(新垣誠副委員長)

もちろん、そのとおり。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

コンシェルジュでということか。

(小川委員長)

今の誠委員の意見では、コンシェルジュが、コンソーシアムの中核というか、責任になり、そして県も呼び、民間も呼び、関心のある人たちが集まってプラットフォームづくりを行う。そして、第7回世界ウチナーンチュ大会のために自分たちができることについて話し合えるそういう交流のプラットフォームの場をつくっていくという意見に関してはどうか。

ウチナーンチュ大会におけるコンシェルジュの一つの大きな役割というような形で捉えている。事業を委託しているのは県であるので、そのコンシェルジュが活動を拡充していくということに対して、県はどのように考えるか。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

コンシェルジュとは今後連携しながらやっていきたいと思う。この件について内容をもう少し詳しく検討してということになるかと思っている。

(小川委員長)

可能性としては大いにあり得るのか。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

「大いに」かどうかはわからない。

(小川委員長)

「大いに」は取ったとしても、あり得ると考えるか。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

はい。

(小川委員長)

わかりました、ありがとうございます。

ほかに誠委員の発言に対する意見・質問あるか。

(新垣誠副委員長)

県がどう絡んでいいのかが、やはり難しいのかなという感じはする。例えば、今、おそらく交流推進課で取り組まれようとしている多文化共生事業であるとか、そういうものの連携という可能性もあるのではないかなと思っている。

(小川委員長)

ありがとうございます。

(県交流推進課 大城班長)

補足として、コンシェルジュの通常の機能としてのコンシェルジュの役割でいうと、今、誠先生がお話をしていただいていた部分で、理想というか、自らウチナーネットワークに関わっていききたい人たちをつなぐ機能として、コンシェルジュのほうでコアの人材を集めて、興味を持っている人を集めて、ネットワーキングをしてSNSでつながって企画をしていくというようなグループを今作っている。

そこにそういう興味がある方に投稿して頂いて、今後いろいろな企画、イベントなどをしていくというふうに考えている。

コンシェルジュの人材育成、自主事業の一環としては、ウチナーシンカオンラインということで、若者が繋がって色々なイベントを行い、興味がある分野について、国内外を含めて日常的に交流をしていく。国別に行ったりもしている。

YouTubeに関しては「ハイサイ、比嘉アンドレス」ということでアンドレスさんをパーソナリティにして、例えば、沖縄の仏壇の紹介ということで仏具店に出向いて色々な仏具を紹介したり、糸満のうみんちゅについてというトピックで、スペイン語で番組を設けたりしている。

その取組はまだ4月から始まったばかりなので、少し走り出した段階だが、そういうプラットフォーム的なところは、実は4月から取り組んでいるところである。

(小川委員長)

わかりました。

しかし、ターゲットはどちらかというとSNSでつながるということから、個人、若者というイメージが強く、そこはそれでとても大切だと思うのが、資金面に関し、企業とのつながりはどうか。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

そこはおそらく、どういうことができるかというのを万国津梁会議の提言として検討というところになってくるかと思う。

(小川委員長)

わかりました。ありがとうございます。

秀彦委員、お願いします。

(新垣秀彦委員)

旬子委員、誠委員の話を知ると、こうしたプラットフォームの構築が非常に重要であると思う。世帯の大きい大会実行委員会は5年に1度だと思うが、もっと主導的になってくるプラットフォームが何らかの形で形成されれば、そこは県が関わらずとも、もしかしたら世界のウチナーンチュ大会もしくは移民に関する教育、継承というのはもっと強化されていくのかなと感じました。

(小川委員長)

例えば、プラットフォームもしくは誠委員の言葉を借りればコンソーシアムについて、4月に開催される141団体から成る実行委員会に、お1人代表者の参加をお願いしますというふうに県がオーソライズして繋いでもらえれば、そのプラットフォームは資金が潤沢でない若者ばかりの集まりではなくて、少し一声かければ大きく広がるような資金や人材も有する実行委員の諸団体とのつながりによるダイナミクスに期待したい。そういったコンソーシアムが直ちに出来るかどうかには触れずに提言書をまとめたいと考えている。

では、最後に佐野委員、よろしくお願いします。

(佐野委員)

ありがとうございます。

今のプラットフォームの話も含めて、大きく分けて2つお話ししたい。1つ目は提言書としての体裁と書き方について。安里委員からもあったが、8ページの「IV. おわりに」の部分については、その前までに、課題ごとに皆さんの発言を引用しながら具体的な提案を書いているので、「IV. おわりに」で抜粋した記載にすると、抜粋されなかったものは何なのかと捉えられるのではないかと。むしろ今日、お話が出ているような、この大会がどうあってほしいとか、大会が終わったあと、どうつなげていくとか、総論的なことを「IV. おわりに」にメッセージとして書いたほうがいいのではないかと。もう少し、皆さんからも御意見が出るといいと思う。

また、個別の事項になるが、7ページの(6)大会について、(6j)として私の発言を引いていただいているが、3行目にある「過去の大会のような皆がシェアできる強い取組があると」は、実際の発言はそういう言い方をしていたと思うが、文字にすると「強い取組」とは何か、わかりにくいかもしれない。前回の発言では、今までの大会は、みんながすぐに共感できるような強い打ち出し、メッセージがあったということを申し上げようとしたのだが、「強い取組」というと、少し意味が変わってくるかもしれない。そのようなメッセージ性というか、みんなが共感できる、共通に持つことができる意識が強いものであってほしい、ということなので、少し表現を変えてそれが伝わるとよいと思っている。

加えて、事務局には申し上げていたが、9ページ以降の発言者別意見に記載されている私の発言は、先般の議事概要の修正版に合わせたい。議事概要も公開されるので、それと平仄が合っているようにしていただきたいということ。以上が体裁に関わる部分である。

大きな2つ目は、この大会そのものについて、今日も意見が出ていたとおり、私たちが万国津梁会議として意見を述べつつ、実行委員会ができていて、実施を担っていくときに、この提言をどのように実行、実施していくのか。県と実行委員会の間でしっかり意思疎通がなされることが必要だが、今議論になっていたように、県が大きな割振りをして、そこに(実行委員会のメンバー組織が)手を挙げてやっていくのか。

提言を全て実現しなくてもいいのだが、取り入れて実施するに至るには、実行委員会としてどういうふうを受け止めてもらうかが非常に重要な部分だと思う。先ほど企業名なども出ていたが、これをやってくださいと明示的に言ったほうがやりやすいのか。それとも、自主性を重んじるほうがいいのか。そこは沖縄の皆さんの受けとめ方というかメンタリティというものもあると思うので、しっかり実施されるということが確保できるやり方がよいと思う。私は個人的には、今日も話が出ていたように、自主性というか、そういうものが感じられるようなやり方、県からやってくださいと言われたからやるのではなく、みんながやりたいと思ってやっているという形が示されるとよいと思っている。

その流れで、今から行うのは難しいと思うので、今年実施できなくてもよいのだが、分科会のようなもの、例えばテレビの話が出ていたが、沖縄テレビ、琉球放送、NHKなどがバラバラではなく、沖縄ローカルのテレビ局が1つのYouTubeチャンネルにおいて、入れ替わりで発信するとか、共通の番組を発信するということがあってもよいと思う。より一緒にやろうね、つながってこうねということが示されるのかなと思うが、メディアの

若い人たちはそういうことを考えてくれるのではないかと思っている。上層部の人たちは、それぞれの局のことを考えると思うが、私がSDGs推進関連でメディアの若い方たちとお話しして思うところとして、若い人たちは、もちろんそれぞれ局としてこういう企画を考えたいというのはあるのだが、それよりもみんなで組んでやったほうがより浸透するし、あるいは役割分担もできると考えてくれる。そのような若手によるメディア分科会、あるいはそういう人たちが自由に動けるような、自由度を持たせられるような仕組みになっているとよい。実行委員会はそれぞれの組織代表の方になるので、当然、社としての意見が出てくると思うが、それを乗り越えて、何かもう少し自由に行えるのもいいのではないかと思った。今年は難しいかもしれないが、何か次回からそういうことができるような、頭出し的なことを1回やってみるだけでもできるとよい。

加えて、先ほど誠先生からもご指摘があったプラットフォーム、コンソーシアムについて、県のSDGsアドバイザリーボードでも同じように、SDGsを推進するにあたり、プラットフォームを作りたいという話をしている。

他県でも進めているところが多く、民間主導でやっていきましょう、もちろん立ち上げは県が主導していかないとなかなか進まないところがあるが、最終的にはみんなが集える場として、民間が運営していく、また、誰でも好きなように参加できるように、バーチャルな場の設定も含め、いろいろ活動していることを情報共有できる、知りたいと思ったらそこに飛び込んで話が聞ける、自分の活動が展開できるという、そういう緩やかなプラットフォームを作っていきたいという話である。ビジネスの分科会的なものも行っていくし、そういうものを全部捉えて、プラットフォームという言い方をしているのだが、そういうものを作っていく必要がありますねという議論をしているところであり、SDGsアドバイザリーボードの議事概要や資料にも載っている。海外ネットワークのほうも、まずコンシェルジュができたのはとてもいい契機だと思っているが、ただ、今のコンシェルジュだけではとてもカバーしきれない話だと思う。そこが核となりつつも、あるいはコンシェルジュが直接の窓口となりつつも、もう少し広く、いろいろと関心がある人たちが参加できる体制を作っていくべきだと思う。

ただ、今日、議論を聞いていて、皆さんとは若干、スピード感が違っているかもしれない、私は、今回の大会でその形ができていなくてもいいのではないかと思っている。もう2月になっており、大会までそんなに時間もない。実行委員会の方々もいきなりそういう話になるとびっくりされるだろう。むしろ、そういうことをこの大会の後、しっかりフォロー

アップとして作っていきますということを掲げておいて、そういう意識で今年の大会に臨み、大会が終わった後、その大会の成果、レガシーを引き継いでいくためにもプラットフォームを作っていく、というほうが県も受け入れやすいのではないかと。

(小川委員長)

佐野委員、ありがとうございました。今のお話は、主に3つの意見があったと思う。

まずは、提言書の構成についてだが、「IV. おわりに」のところを箇条書きでなく総論的にまとめたほうが良いという意見であった。先ほど安里委員の意見では、第III章で文章での説明があった内容を、なるべく網羅する形で箇条書きするのが良いのではないかと。いうことであったように理解しているが、それを第IV章とし、新たに第V章として「おわりに」を設け、総論的な文章でまとめるのがよいのではないかとというのが佐野委員の意見である。

次に、佐野委員の発言について、草稿段階の議事録をもとに分析したために、修正後の議事録が提言書案に反映されていない点。これは事務局のほうに差替えていただくよう依頼する。

更に、本提言書に記載予定の「提言」欄に、大会実行委員会の組織名を記載し割り振りをすることについて、そのように期待できる組織名を記載するのは、沖縄文化的にどうだろうか、という意見である。

そのあたり、履き違えているのかも知れないので、お聞かせ願えればと思う。

(沖縄県交流推進課ウチナンチュ大会準備室 宮城室長)

実行委員会の皆様には「この分野について、もし、御協力いただけるなら」ということは言えると思うので、名前を入れる形ではなく、やはり自分の分野はよく存じているかと思うので、自主的な協力を呼びかけていければと考えている。

(小川委員長)

自分には関係ないと思って、読み飛ばしてしまう場合があると思う。そういう場合は、例えばIT関連企業というような形で書かせていただくのは問題ないかと。

(沖縄県交流推進課ウチナンチュ大会準備室 宮城室長)

それはあると思う。名指しはどうかと思う。

(小川委員長)

そのようであれば沖縄文化的には受け入れられるか。

(世界のウチナーンチュ大会事務局 宮城室長)

そのように思う。

(小川委員長)

秀彦委員、そういう形でもよいか。

(新垣秀彦委員)

実行委員会のグループ分けによって、お願いしていくということも良いと考える。

次に、最後の終わりの部分だが、具体的に書き込むのもいいのだが、そこが自分のところではないとなると、主体的な取組に繋がらないので、例示という趣旨でも良いのではと思う。そこはこの課題解決のために、それぞれの実行委員会の皆さんが、それぞれができる範囲を自分たちが考えていただくというような努力をしてもらうということも必要だと思う。

(小川委員長)

わかりました。

それでは、「IV. おわりに」という最後の章は総論的な文書でまとめ、その前の章にそのように、それぞれ実行委員会の諸団体の皆様が主体的に考えてもらえるような仕掛けづくり、すなわち、IT関連の方々はこのことに賛同していただき、活動していただいけませんかというのがピックアップしやすいような、そういう体裁に整えていきたい。

それから、分科会は今からつくるのは難しいのではとの佐野委員の話があったが、例えば、テレビなど若手のメディア関係の人が集まって、その方々が主体的に今回の第7回世界のウチナーンチュ大会のために動けるようなことはいかがか。とてもいい案だと思うが。実行委員会の方々に、そういうことを投げかけたら、実行できそうなものか。その辺の感触を教えて欲しい。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

大会まであとわずかというところなので、やはり時間的に厳しい。次回、生かせるような形で話をしてみることは可能と考えている。

(小川委員長)

わかりました。

佐野委員も第7回大会では今後はこういう形でやっていこうという次回への橋渡しになるようなそういう提言も入れられたらいいのではないかという意見だったので、次回の第8回から検討するということで。

5分の休憩を挟み、最後に約25分自由討論をしたい。

(休憩) 01:30:03～01:36:29

(1) 自由討議

(小川委員長)

再開したい。

これから自由討論に移るが、自由討論は、この委員会はこれで最後になるので、私たちの今回の目標は具体的に提言書を完成することになる。

それぞれの役割分担を決めていきたいと思うが、その役割分担を終え、それを一つにまとめた中で皆様にメールで読んでいただき、それでよしということであれば、それを提言書完成版にしたい。

提言書の体裁、構成に関しては、先ほど佐野委員から、それから若干安里委員のほうからあった。私自身も気になっているところもあったので、そのことについて話しつつ、それぞれ今後この提言書を完成するにあたり、どういったところで尽力いただけるかということ話を話していきたい。

まず、資料3を見て欲しい。「Executive Summary」と書いたが、これは削除したいと思う。理由は、提言書であるので、最初からまとめてしまうと、あとを読まなくなってしまう。また、ここで語られていないことで大切なことというものもあるような気がしている。よって、最初のまとめは、削除して、「はじめに」から始めたい。

そして、図2に、課題1は何色で、課題2は何色でという、色の注釈をつけたい（4ページ）。

尚且つ、本日も多くの素晴らしい意見を戴いたので、1月5日の会議での意見のみならず、本日の意見も、本提言書案に追記していきたい。具体的には、それぞれ第Ⅲ章からの課題1、2、3、4、5、6の中で織り込んで文章化していきたいと思っている。私のほうで引き続き第Ⅲ章は担当させていただければと思っている。

先ほど指摘のあった第Ⅳ章だが、タイトルは何になるか分からないが、内容的には実行委員会の方に自主的に選んでもらえるような、箇条書き的な記載を提案したい。課題1、2、3、4の代わりに、例えば「IT関連企業にできること」、「教育関係機関にお願いしたいこと」というような、各専門分野別への提言みたいなものを箇条書きで書いたらどうか。

これは、安里委員からの指摘にもあったように、この箇所は大会実行委員の諸団体に対して分かりやすく提示できるのではないかという案も踏まえての提案。

そして、今度新しく第Ⅴ章として、「おわりに」という形で今までの流れをまとめるような文章をつける。

先ほどからお伺いしている、発言者別の意見の資料は、あるほうが良いと思うがどうか。

そして、本日の意見も受けて、例えば大会実行委員9ページ目は(1d)で終わっているが、(1e)(1f)(1g)というふうに本日の発言を議事録から一括して、ここで意見として出されたものが本文で反映されるという形を取りたいと思っている。

構成は今のよう形で考えているが、皆様からの意見を聞きたい。

(新垣秀彦委員)

取り組む事例に関して、例えばテレビ局関係のような形というように我々がそこまで書く必要があるかなという気がする。

我々としてはこういうことをして欲しいので、あとは実行委員会に委ねて、どこが自分たちがやるべき範疇なのか、それについては世界のウチナーンチュ実行委員会の事務局が、ここはこの辺りに期待しているところ、そういう振り方のほうが実行委員会各委員としても主体的に動けるのではないかという気がしたがどうか。

(小川委員長)

安里委員からも、この文章の中で一覧にして書くほうが分かりやすいのではないかという意見があった。名指しにはしないまでも、例えばIT関連企業に期待する項目ということで、1、2、3、4、5、6というふうに挙げるほうが実行可能性が高いと思う。

課題別というのは私たち委員の中の分けだが、それ以外の専門分野別の区分というのはあったほうが、実行委員の各団体としてはどこに注目してこの提言書を活用すればいいのかが伝わりやすいのではと考える。

(新垣秀彦委員)

分かりました。

(小川委員長)

ありがとうございます。その他はありますか。

佐野委員、お願いします。

(佐野委員)

ありがとうございます。

今、秀彦委員がおっしゃったことは、私も少し気になっている。準備室・事務局もあるので、この提言を受け取った大会準備室・事務局が分野別にさばいて、実行委員会に提示するというほうがより正しく分別できるのではないか。

必ずしも企業ごとに、とか、教育関係者などと明確に分けきれないものもあると思う。もちろん分別して伝えたほうが、メッセージが正しく伝わりやすいが、これを受け止める準備室・事務局が自分たちで整理して実行委員会にかけていただくほうが、健全な委員会と県の関係なのかと思うが、いかがか。

(小川委員長)

佐野委員、ありがとうございます。

県のほうといたしましてはいかがか。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

委員の皆様のご意見どおりでよろしいかと思う。実行委員会を開く際には、この対応につ

いて示して、委員の皆様の関連するところで御協力いただけるのがあれば是非ということ
は可能なので、今お二人の委員からあった内容で構わない。

(小川委員長)

そのほうがよろしいということですね。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 宮城室長)

はい。

(小川委員長)

分かりました。ありがとうございます。

そうすると、先ほど第Ⅲ章の後に第Ⅳ章で専門分野別という提案をしたが、それを割愛
し、Ⅳ章は「おわりに」として、そして「おわりに」には総論としての文章を書く形でよ
いか。構成についてそのような形でよいか。

大丈夫ですか。ありがとうございます。

そうすると、「はじめに」が第Ⅰ章、そして第Ⅱ章が提案の内容について委員別にまと
めたもの、そして第Ⅲ章は提案内容という形となり「Ⅳ.おわりに」が最終章となる。

第Ⅰ章から第Ⅳ章まで、もし可能であれば各委員の自主性を尊重して、担当を希望され
る箇所があればお声がけいただきたい。

第Ⅰ章はあまり変わらないが、短いので、さらにもう少し増やしたほうがいいのかなど
考えている。

第Ⅱ章の委員別の箇所は本日の提案を踏まえ、図2の注釈と課題別意見の追加が増える。

第Ⅲ章に関しては、本日の意見を反映してまとめる予定である。

第Ⅳ章「おわりに」は、総論ということで全く新しい形になるかと思う。

まずは、第Ⅰ章からⅣ章までの追加訂正について、是非ともここを担当したいとお手
を挙げていただくことが一番である。

実は、今後の作業として私の考えを先に述べると、まず本日の議事録を受けて私が第
Ⅱ章の図2（本日の会議の課題別意見）を追加し、第Ⅲ章に反映させるという作業を行う。

その作業を受けた後、第Ⅰ章、第Ⅱ章に関しては、秀彦委員が、例えば市町村の中で移
民の学習とかもっと活発な活動をされたらどうかという話をされたので、もし可能であれ

ば、私が今日の議事録を受けて、第Ⅲ章の課題1、課題2を追加したものに、抜けているものがないとかチェックしていただければありがたい。

それから、旬子委員は、経済発展に関連して、課題3、課題4に関する追加事項をチェックしていただければありがたい。

安里委員は最終提言書にお目通しはいただきたいと思う。誠委員と佐野委員には、共通課題を解決するために大会でできる試みや、大会について、そして第Ⅳ章の「おわりに」の御担当をお願いしたい。

まずは誠委員、どうですか。

(新垣誠副委員長)

はい。承知しました。

「おわりに」と第Ⅲ章の(5)(6)になるか。

(小川委員長)

(5)、(6)が1人分であり、そして第Ⅳ章「おわりに」が1人分だが、ここは結構重なるところがあるので、お二人で力を合わせてお願いしたい。

佐野委員も大丈夫ですか。

(佐野委員)

やり方は誠先生と相談して対応する。

一方で、現在の(1)から(6)まで、きちんとまとまっていて、今日の議論の分を小川先生に対応していただけるのであれば、(追加の作業において)あまり付加価値をつけられないのではないか。小川先生が今日の議事録を見て追記していただけるのであれば、みんなでそれぞれが今日話したことが載っているかという確認で十分な骨格ができているように思うが、いかがか。

(新垣誠副委員長)

確かに佐野委員が述べた通り、今回とても多くの意見が出て、どこまで提言するのかというぐらい多く出ているような気もするので、内容はもう十分ではないのかなと自分も感じている。

あとは体裁と最後の「おわりに」部分で、しっかりと何が提言なのかというのがはっきり分かる形にすればいいのではと思う。

小川委員長が述べた通り、カテゴリー分けについて、これは誰が担った方が良いのかというのが、緩やかに分かる形のほうがいいのではないか。

(小川委員長)

カテゴリーについてどうすべきか。

(新垣誠副委員長)

カテゴリーというか何と言うか、ここは難しい。

(新垣旬子委員)

I T分野であるとか細かく記載するのではなく、例えば2つ、3つぐらい、このような業界があつて、こういうことをやって頂けるとありがたいというような、もう少し大まかなもので良いのではないか。箇条書き1、2、3、4、5というふうに決めてしまうと気構えるので、各業界は、自分たちについては、これはお手伝いできるな、これは頑張れるなど思えることを文章の中でカテゴリー的に書くのはどうか。

(小川委員長)

そうしますと、この章の中で、それともまた別の章を立てた方が良いか。

(新垣旬子委員)

まとめの方が良い。

(小川委員長)

まとめのほうでのやんわりとしたカテゴリー化をするという感じだろうか。どのような形で「おわりに」の総論を考えてたらいいか。

(新垣誠副委員長)

最終的に実行委員会に持って行くのは県のほうだと思うので、事務局との調整であると

思ったりもするがどうだろうか。

(佐野委員)

分量にもよるが、メッセージの前に、先ほどの教育関係のことや Wi-Fi・デジタルといった技術的なこと、そのような分野というか、万国津梁会議で議論してきた課題ごとではなく、大会に関わる 이슈ごとにキーとなる提言をまとめて示した上で、総論を書くような形で「おわりに」を作るのはいかがか。そのくらいの大まかに3つぐらいでまとめて、というのが、今の議論と合っているのではないか。それを誠先生と手分けして、例えば誠先生に総論を書いていただき、私のほうで 이슈ごとに分ける部分を担当する等、そういうことではいかがか。皆様と理解が一緒だといいが。

(新垣誠副委員長)

小川委員長、いかがか。

(小川委員長)

提言書に色々と盛り込むと結局見えなくなり困るので、本日の資料としてまとめた「提言書案(資料3)」には、第IV章の「おわりに」を箇条書きの体裁にした。

今まで第III章で色々と書いてきたものをまとめ、箇条書きの形を示して、そしてIV章は文章のみで終わることもあり得ると思った。文章での説明及びその箇条書きでの表現は、確かに提言書として全てに目を通してもらえるわけではない。見やすい形での表示は必要であり、その表示の仕方は、IT関連とかそういうものではなく、句子委員が仰るように3つに収まるかどうかは定かでないものの、それぞれの 이슈毎なのか、すなわち教育等の形なのか、まだ私の頭の中では何が最善なのか分からないが、大枠で分けて提示するというのは必要だとは思っている。

(佐野委員)

そもそも論になるかもしれないが、万国津梁会議は知事からテーマを与えられて議論しているわけだが、他の委員会と違って、出した提言を誰が行うかを決めて、それをしっかり行ってもらわなければならないような、また、それが行われたかどうかをモニターするというような位置づけの会議ではないのではないかと理解している。もちろん具体的な提

言、提案を行うのだが、もう少し上位の提言をして、それを受け止めた県なり関係機関が、ではどうしようと考えて、具体的な案を考え実行していくという関係性なのだろうと思っており、これができたかできないか、最後にそれが確認されるような形できっちりお示しする、というのも違うのではないか。受け止める側において、(提言されたことを)全部やらなければいけないと思われるのも、万国津梁会議の位置づけからすると、マイクロマネジメントな感じになるのではないか、という恐れもある。

そうは言いつつ、万国津梁会議の課題に沿って1、2、3、4に分けているので、それだけではさすがに受け取る側は分かりにくいので、自分ごととして受け止めて自主的に動いてもらえるように、もう少しカテゴリーを整理して提示するのもいいのではないかと思っている。なので、分け方は緩やかでもいいのではないか。

(小川委員長)

今回の会議の資料3の「おわりに」(8ページ)は、全ての意見を公平に羅列することを、逆にあえて差し控えた記載にとどめた。課題1、課題2、課題3、課題4で1つ挙げるとした場合、私なりに意見をまとめた中での実効可能性の高い上位項目という形で短くまとめた経緯がある。しかし安里委員を含め、このようなまとめ方では出ている提言やアイデアが見えてこないのではということであれば、今度は全部を箇条書きにしようかという話になった。今度はまたそれに対して、課題解決のために全てやらなければいけないのかという、相手を焦らせてしまうような掲載にならないかというようなこととなった。意見は一つに定まらないが、その表づくりも含め、お二人にお任せしてよいか。

(佐野委員)

表というか、再整理の部分を私がやってみて、総論を誠先生にお任せしてもよいか。私の整理が終わったら誠先生に見ていただく、時間の問題があれば並行して小川委員長に見ていただくというような形で進められればと思う。

(新垣誠副委員長)

はい。

(小川委員長)

その整理された表というのは第Ⅲ章に入るという考えでよいか。つまり第Ⅲ章を受けての整理という理解で良いか。

(佐野委員)

作成してみて、どちらがよいか最終的に判断いただくということでよいと思う。中身としては第Ⅲ章に書いてあることを別の切り口で整理し直すということなので、第Ⅲ章の中に入っていたほうがよいかもしれない、と現時点では思っているが。

(小川委員長)

ありがとうございます。

では、宿題の確認ですが、「Ⅳ. おわりに」は誠委員が主体的に進めて頂く。そして第Ⅲ章の全体のまとめの表は佐野委員が主体的にまとめていただく。なお第Ⅲ章の課題1と2は秀彦委員に、課題3と課題4は旬子委員にお伝えしたが、先ほどの佐野委員の御意見では、全体をみんなで見ましようという意見だったと思うので、第Ⅲ章のみならず、もし何かお気づきの点が、第Ⅰ章の「はじめに」、第Ⅱ章の「提案内容(委員別)」、それから第Ⅲ章は、委員の皆さんで何かお気づきの点があれば、その都度事務局にお伝え頂き、それを全て加味した形で最後提言書をまとめることとしたい。

大体いつ頃、まず私が議事録をいただけるか。

(沖縄県交流推進課ウチナンチュ大会準備室 阿波連主幹)

まずは、事務局で議事概要を仕上げるのが急ピッチで必要だと思う。テープ起こしの後、文言を整えて、それで各委員の皆様にお送りして了解を取り、小川先生に提供したい。

(小川委員長)

その後私ですね。ということは結構遅いですね。

(沖縄県交流推進課ウチナンチュ大会準備室 阿波連主幹)

各委員の議事概要のチェックまで最短でも1週間はかかると思う。

(県交流推進課 東江主幹)

文字起こしそのものは、早くても来週の水曜日ぐらいかもしれない。

(小川委員長)

これから連休に入りますからね。

(小川委員長)

分かりました。では、その1週間後ぐらい。私がそれを受け取って、第Ⅲ章に本日の会議での意見を追記する。委員の皆様方におかれましては、今のところ第Ⅰ～Ⅱ章はほぼ変わりませんので、これらふたつの章で何かお気づき点がありましたら、加筆訂正等々、御意見を事務局のほうにお渡しいただければと思う。

私のほうに手渡されて約2週間後には第Ⅲ章の草案ができる。つまり本日の議論を踏まえた形での意見をまとめたいと思うので、2週間後というと2月23日以降ぐらいにはお渡しできると思うので、月末にでもお目通しいただき、佐野委員と誠委員はそれからの作業になる。

よって、2月の下旬になるかと思う。よろしく御協力いただきたい。

そして、第Ⅲ章の内容も踏まえて皆様方から全体に関する追加訂正の意見をいただければと思う。

このようなタイムスケジュールは大丈夫か。提言書の提出は3月の半ばでしたか。

(沖縄県交流推進課ウチナーンチュ大会準備室 阿波連主幹)

3月中を予定している。早くて3月中旬と考えている。

(小川委員長)

了解。

それに間に合うように、皆様、どうぞ御協力よろしくお願ひいたします。

自由討論はここまでとしたい。

提言書案について、本日委員の皆様から出された意見等について議事概要を受領後、私において提言書案に反映させた後に最終確認を行う。

それとは別に、Ⅲ章のまとめの表、それからⅣ章の「おわりに」のほうは、佐野委員、

そして誠委員にお願いしているので、原稿が届いたら協力願いたい。

本日の議事概要についても、事務局から来週の水曜日を目処に、委員の皆様への最終確認をしたいので協力願いたい。

提案書の知事への手交の詳細については、今後事務局で調整し、事務局から改めて連絡するとのこと。

本日は、お忙しい中、出席いただき誠にありがとうございました。

以上をもちまして本日の会議を終了したい。お疲れさまでした。

(了)